

ナス「PC 筑陽」の促成栽培における整枝法の違いが生育および収量に及ぼす影響

○古賀 武・龍 勝利・松野 聡
(福岡農林試筑後)

【目的】

本県の促成ナス栽培では、単為結果性ナス「PC 筑陽」への品種更新が進んでおり、本品種に適した生産技術の開発が求められている。「PC 筑陽」は着果処理が省力できる一方で、葉が「筑陽」より小さいため受光量が少なくなりやすい。このため、「PC 筑陽」では葉数や芽数を増やして葉面積を増加させる整枝法を開発することで増収できる可能性がある。

そこで、本研究では整枝法の違いが「PC 筑陽」の生育および収量に及ぼす影響を明らかにする。

【材料および方法】

試験区の構成として、主枝の葉腋から発生した各側枝を1芽1果採りとし果実の上に2葉残して摘心した葉数増加区、主枝の畝上70cm以下の葉腋から発生した側枝のみ2芽2果採りとし果実の上に1葉残して摘心した芽数増加区、各側枝を1芽1果採りとし果実の上に1葉残して摘心した対照区の3区を設けた。試験規模は1区4株3反復とした。2019年9月9日に畝幅165cm、株間60cm、1条植えて定植し、主枝V字4本仕立てとした。外張りには散乱光フィルム(タキロンシーアイ(株))を展張し、10月23日に白黒ダブルマルチ(大倉工業(株))を被覆し、11月6日～4月30日に内張りカーテン(三菱ケミカルアグリドリーム(株))を展張した。日中のハウス内CO₂濃度が400ppmを下回らないようにCO₂施用を行い、夜間の加温温度は13℃、日の出2時間後～日没1時間後の加温温度は概ね20℃とし、換気温度は22

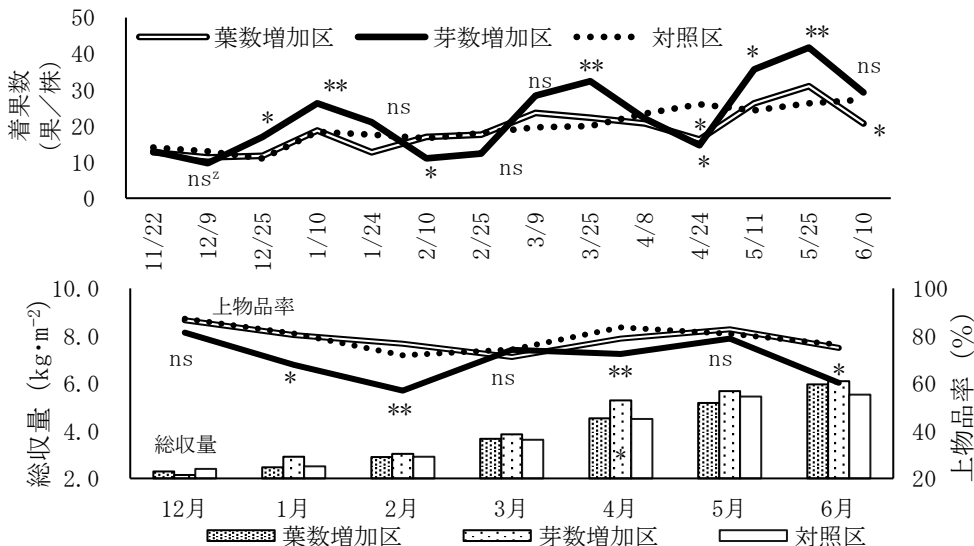
～28℃とした。

定植後2週間おきに株当たりの着果数(開花数+着果数)を計測するとともに開花時の側枝の茎径を測定した。収穫は果実長19cm以上を目安として2019年10月～2020年6月に行い、外観の形状から上物および中下物に分類し、それぞれの果実重量を測定し、収穫時に切り戻した側枝の葉数を計測した。

【結果および考察】

側枝の葉数は葉数増加区で多かった一方で、芽数増加区では一時期を除き差が認められなかった。また、栽培終了時のLAIはいずれの区とも同等であった(データ略)。株当たり着果数は芽数増加区の1/10で26.3果に増加した後2/10では11.0果に減少した。さらに、3/25では32.4果に増加、4/24では14.7果に減少し、5/25では41.7果に増加した(第1図)。このように、芽数増加区では時期による着果数の増減が大きかった。総収量は芽数増加区で4月のみ対照区より多かったが、上物品率は1月、2月、4月および6月で対照区より低くなった。一方、葉数増加区では収量および上物品率ともに対照区と差が認められなかった(第1図)。

以上のことから、「PC 筑陽」の促成栽培における整枝法として、同一節側枝の芽数を増加させると時期ごとの着果数の増減が大きくなり、総収量の増加は一時期にとどまり上物品率が低下することが明らかとなった。また、側枝の葉数を増やしても着果数や収量に及ぼす影響は小さかった。



第1図
整枝法の違いと着果数(上)、収量および上物品率(下)
***, *は対照区に対して1%, 5%水準で有意差あり, nsは有意差なし, 葉数増加区は4/24, 6/10を除き有意差なし(Dunnettの多重比較検定)